

# あんな本・こんな本

2023年3月3日発行 No.88

ボランティアによる新着図書・資料案内

この号では女性教育情報センターが2022年7月～2023年1月に新しく受け入れた資料の中から、ボランティアが選んだ本を紹介します。新着の全資料は下記の文献情報データベースからご覧いただけます。

[https://winet2.nwec.go.jp/bunken/cgi/newbook\\_cal/opac\\_newbook\\_cal.cgi](https://winet2.nwec.go.jp/bunken/cgi/newbook_cal/opac_newbook_cal.cgi)

読んでみました

## ほんとうの多様性についての話をしよう

サンドラ・ヘフェリン著 旬報社 2022年

[リストNo.13]



本書は、日本とドイツにルーツを持ちどちらの国籍も有する著者が、自身の体験を交えながら、「当事者から見る多様性」と「マジョリティが考える多様性」との隔たりを明らかにしようとするものだ。

「マイクロアグレッション」という言葉が、この本の理解を助けてくれた。例えば、外国人に対し「日本語がお上手ですね」とか、女性の仕事をほめて「女性ならではの細やかな感性」等。マジョリティの側にいると何気なく言ってしまう言葉だが、受けた当事者は、何かもやもやし、偏見や見下しを感じる。

人が持っている属性は様々だ。人種、性別、宗教、年齢、障害があるかないか等、自分がマジョリティの側に立つこともあれば、マイノリティになることもある。特権のあるマジョリティの位置にいる時ほど、普段の言葉の表現は適切か、自覚的に見直すべきだなと思った。既に「肌色」という色鉛筆やクレヨンは見直されて無くなっているのに、その言葉をつい口にしてしまうことが私にもあった。たいしたことではないと思う人が多くいると社会は変わらない。

日本の学校における理不尽なルールにも触れている。小学生には体操服の下のブラジャーを禁止し、中学校では生徒の下着の色を指定する等。小学生らしさ、中学生らしさへの思い込みや勝手な理想の押し付けが根底にあるという。さらに「下着などの女性の最もパーソナルなことについて他人から指示されても仕方がない、と子どもたちに思わせてしまうこと」も大きな問題だと著者は指摘する。

ところで、ドイツでは、移民の受け入れに際し、ドイツ語だけでなくドイツの文化・慣習を学ぶ制度を用意しているが、「基本的にはどの文化も尊重されるべきだが、同時に多様性とは他の国の慣習をすべて認めることではない」との共通認識がある。女兒の就学拒否や強制婚などの女性に対する暴力や蔑視には、はっきりとノーを突きつけ、議論や衝突を恐れず交渉していく姿勢は、日本も見習うべきところだ。 [TK]

## ジャーナリスト与謝野晶子

松村由利子著 短歌研究社 2022年

[リストNo.38]

与謝野晶子がジャーナリスト!? このタイトルにまず驚いた。

著者がこの本を書くきっかけとなったのは、晶子がフランスの新聞『ル・タン』のインタビューに、最上の職業は「新聞記者」だと答えたことと書いているのを読み、不思議に思ったことだったという。著者の松村由利子氏は歌人であるとともに、新聞記者を長く勤めてきたとのことである。だからこそこの言葉に鋭く反応したのであろう。

晶子は大正から昭和にかけて評論家として活躍していた。筆者も若いころ、『青鞥』創刊号を飾った「そぞろごと」（“山の動く日きたる”）に感動し、「母性保護論争」を耽読したことを思い出す。母親への国家の支援を説くらいてうに対し、母性は女性の



一側面に過ぎない、女性が社会的経済的に自立することこそ重要だとし、国家などあてにするな、というやや乱暴な説には抵抗があったものの、“ワンオペ育児”を批判して「むしろ父性を尊重せよ」と主張する晶子の姿勢にひそかに快哉を叫んだものだった。

著者は、メディアに発表された晶子の時事問題、社会問題に関する短歌（「時事詠」）に注目する。短歌という形式を通して時代に働きかけた晶子を「ジャーナリスト」ととらえているのだ。それは政策批判、検閲制度への抗議、米騒動への共感など多岐にわたる。例えばこんな衝撃的な歌がある。

産屋なるわが枕辺に白く立つ大逆囚の十二の枢（『東京日日新聞』1911年3月）

幸徳秋水、大石誠之助ら12人が処刑された大逆事件の際、難産で苦しんでいた晶子が見た幻影である。本書は、与謝野晶子の、歌人、社会評論家、ジェンダー平等を主張する思想家、古典の翻訳家（源氏物語の現代語訳は今も名訳として名高い）、教育者（文化学院の創立者の一人として自由主義教育を实践）という多彩な姿に、これまでとは違う角度から斬新な晶子像を付け加えてくれた。同時に、与謝野晶子という巨人にはまだまだたくさんの切り口があることを感じさせてくれる一冊でもあった。

とはいえ晶子の一番の魅力が、光景が目に見え、心が開けてくるようなこんな歌にあることも確かだ。

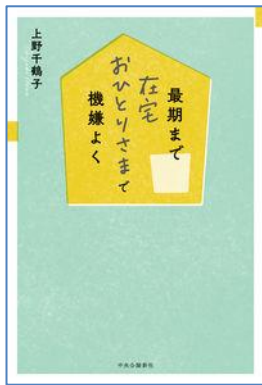
川ひとすじ菜たね十里の宵月夜母が生まれし国美しくむ

[YK]

## 最期まで在宅おひとりさまで機嫌よく

上野千鶴子著 中央公論新社 2022年

[リストNo. 24]



上野千鶴子さんといえば、「おひとりさま」という言葉を生み出し、世に広めた社会学者。そのお名前と功績はかなり前から知っていたが、実は著書をちゃんと読んでいたことはなかった。私自身、定年の二文字が近づいてきており、「老後の計画というものを考えなくては」と思っていたので、10名の人生の大先輩と上野さんが人生の終焉に向き合う姿に元気をもらった。とはいえ、Age is just a number! 年齢なんて関係ない! と思っているのも確か。定年を迎えたとしても、まだまだ健康でやりたいことを楽しめるはず、と思っていた。でも、この本のなかの『老後』がいつ始まるのか。それは、自分の親が死んだ時です。私の友人は、『親が死ぬと、次は自分だ』という気分になる。死と自分の間にある衝立が親で、その衝立が取り払われた感じだ』と言っていました」という一文を読んで、少し考えが変わった。自分の老いと向き合うきっかけは人それぞれだと思うが、多分、私自身も親を看取った時に自分も死に近づいているのだと悟るだろう。

上野さんは、この本のなかで、「金持ち」ではなく「人持ち」になることが、最期までおひとりさまで「機嫌よく」生きることに関わり、大切にしている。身近なつながりを大切にして周りに迷惑をかけることに罪悪感を持たず、お互いに助け合う関係性が作れば、在宅のままおひとりさまで最期を迎えられることが可能だろうと綴っている。上野さんの言うとおりの、一人暮らしであっても住み慣れた場所で自分らしく最期を迎えられるのか、介護制度などに疎い私は半信半疑などところがあるが、頭で考えていても何も始まらない。まずは「人持ち」になれるように、今あるネットワークをメンテナンスしながら、さらに豊かなものとなるように人との出会いを大切にしたいと思う。

[SM]

## 日本史の13人の怖いお母さん

真山知幸著 扶桑社 2022年

[リストNo.4]

本書では13人の母が3タイプに分けて紹介されている。第1は「パワフルすぎて暴走した母」（北条政子や日野富子など）第2は「息子への愛が強すぎた母」（家康の母や浜野矩随の母）第3は「家を守るために奮闘した母」（家光の母や天璋院篤姫など）

いずれも名だたる人々で、戦国から江戸期の武家の女の凛とした覚悟をもった生き方やたくましさや舌を巻かざるを得ない。一方、我が子を一流の彫金師にするべく奮闘する浜野矩随の母は、落語のネタになるほどの人であった。

時代背景や複雑な人間関係などにやや説明不足の感があるが、怖いほどの母の強さを感じながら読み進めるうちに、日本の歴史は女が作ったと思わせられる一冊である。なお、ルビ付のため子どもにも読みやすい。

[MN]



2022年7月～2023年1月に女性教育情報センターが新たに受け入れた図書からボランティアが選んだ本です。

	書名・副題 / 著者・編著者名	出版社	出版年月	請求番号
1	からだのきもち：境界・同意・尊重ってなに？ ジェイニン・サンダース作；サラ・ジェニングス絵；上田勢子訳	子どもの未来社	2022.7	151/Ka62
2	ウイメン・ウォリアーズ：はじめて読む女戦記 パメラ・トローラー著；西川知佐訳	花束書房	2022.8	209/U56
3	だから私はここにいる：世界を変えた女性たちのスピーチ アンナ・ラッセル著；カミラ・ピニエイロ絵；堀越英美訳	フィルムアート社	2022.5	280/D31
* 4	日本史の13人の怖いお母さん 真山知幸著	扶桑社	2022.8	281/N71
5	あの日を刻むマイク：ラジオと歩んだ九十年 武井照子著	集英社	2022.7	289/A49
6	オリビア・ニュートン・ジョン自伝：信じることをやめないで オリビア・ニュートン・ジョン著；中川泉訳	シンコーミュージック・エンタテイメント	2022.6	289/O71
7	津田梅子：女子教育のとびらを開く 高橋うらら文	講談社	2022.9	289/Ts34
8	80歳のスパイス屋さんが伝えたい人生で大切なこと 吉山武子著	KADOKAWA	2022.8	289.1/H11
9	フィンランド幸せのメソッド 堀内都喜子著	集英社	2022.5	302/F27
10	ハンナ・アレント：全体主義という悪夢 牧野雅彦著	講談社	2022.9	311.2/H29
11	にじいろのペンダント：国籍のないわたしたちのはなし 陳天璽, 由美村嬉々作；なかいかおり絵	大月書店	2022.7	329.9/N73
12	男性中心企業の終焉 浜田敬子著	文藝春秋	2022.10	336.4/D38
* 13	ほんとうの多様性についての話をしよう サンドラ・ヘフェリン著	旬報社	2022.7	361.8/H85
14	差別は思いやりでは解決しない：ジェンダーやLGBTQから考える 神谷悠一著	集英社	2022.8	361.8/Sa11
15	女性のキャリアとビューティケア：昇進と外見・身だしなみの関係性を考える 乙部由子著	ミネルヴァ書房	2022.11	366.3/J76
16	人類進化の傷跡とジェンダーバイアス：家族の歴史的変容と未来への視座 横田幸子著	社会評論社	2022.7	367.2/J52
17	SNSフェミニズム：現代アメリカの最前線 井口裕紀子著	人文書院	2022.11	367.253/Sn
18	マスキュリニティーズ：男性性の社会科学 レイウイン・コンネル著；伊藤公雄訳	新曜社	2022.5	367.5/Ma67
19	女子サッカー選手です。そして、彼女がいます 下山田志帆著	偕成社	2022.7	367.9/J78
20	同意って何だろう？自分のきもちと相手のきもち アルバ編著	金の星社	2022.3	367.9/Mi44
21	大人のための「性教育」：子どもに語る前に 岡崎勝, 宮台真司編著	ジャパンマニシスト社	2022.1	367.9/O86

22	裸で泳ぐ 伊藤詩織著	岩波書店	2022.10	368.4/H11
23	「ヤングケアラー」とは誰か：家族を“気づかう”子どもたちの孤立 村上靖彦著	朝日新聞出版	2022.8	369/Y57
* 24	最期まで在宅おひとりさまで機嫌よく 上野千鶴子著	中央公論新社	2022.6	369.2/Sa18
25	わたしは「ひとり新聞社」：岩手県大槌町で生き、考え、伝える 菊池由貴子著	亜紀書房	2022.10	369.31/W47
26	やっぺす!：石巻のお母さん、まちづくりに奮闘する 兼子佳恵著	英治出版	2022.9	369.31/Y59
27	ピンクとブルーに分けない育児：ジェンダー・クリエイティブな子育ての記録 カイル・マイヤーズ著；上田勢子訳	明石書店	2022.10	379.9/P66
28	科学史から消された女性たち（改訂新版） ロンダ・シービンガー著；小川真里子、藤岡伸子、家田貴子訳；十川治江、脇田耕二、福井沙羅編集	工作舎	2022.9	402/Ka16
29	こんには!生理：生理と仲よくなるために大切なこと ユミ・スタインズ、メリッサ・カン著；ジェニー・レイサム画；北原みのり訳	集英社	2022.7	495.1/Ko75
30	フェミニスト・シティ レスリー・カーン著；東辻賢治郎訳	晶文社	2022.9	518.8/F18
31	台所図鑑：キッチンには人生がつまっている 大木奈ハル子、三田みどり著	大和書房	2022.6	596/D15
32	ファーストペンギン：シングルマザーと漁師たちが挑んだ船団丸の奇跡 坪内知佳著	講談社	2022.10	661/F15
33	ははとははの往復書簡 長島有里枝、山野アンダーソン陽子著	晶文社	2022.4	740/H14
34	ジェンダー写真論 笠原美智子著	里山社	2022.8	740.4/J36
35	お嬢さんと嘘と男たちのデス・ロード：ジェンダー・フェミニズム批評入門 北村紗衣著	文藝春秋	2022.6	778/O35
36	女になれない職業：いかにして300本超の映画を監督・制作したか。 浜野佐知著	ころから	2022.9	778/O66
37	The girls：性虐待を告発したアメリカ女子体操選手たちの証言 アビゲイル・ペスタ著；牟礼晶子、山田ゆかり訳	大月書店	2022.7	781/Th2
* 38	ジャーナリストと謝野晶子 松村由利子著	短歌研究社	2022.9	911.1/J21
39	99年、ありのままに生きて 瀬戸内寂聴著	中央公論新社	2022.5	914.6/Ky8
40	ウクライナから来た少女ズラータ、16歳の日記 ズラータ・イヴァシコワ文・絵	世界文化ブックス	2022.10	916/U59



\*印の本は **読んでみました** に感想文を掲載しています。

連絡先：〒355-0292 埼玉県比企郡嵐山町菅谷728

国立女性教育会館（NVEC）

ボランティアルーム内「あんな本こんな本」担当